

# 日本ファシズム連盟覚書

河 西 英 通

## 要 旨

ファシズム文学をめぐる文壇の論議がピークを迎えた1932年（昭和7年）、いくつかのファシズム文学運動が族生し、日本ファシズム連盟（1月結成）もそうした中の一つであった。連盟のメンバーは、文壇において疎外された小作家・小理論家をはじめ、大学教授、弁護士、新聞記者などであった。連盟の主張は機関誌『ファシズム』に見ることができ、大方、次の四者に代表される。

① イタリア文学者岩崎純孝のファシズム文学論。彼はイタリア文学界の動向に影響をうけ、地方主義を中心とするファシズム文学論を主張した。

② 小説家野島辰次のファシズム論。彼は日本ファシズムを民族意識、国民意識の自覚・発揚に求める国民運動としてとらえた。

③ 経済学者林癸未夫の国家社会主義。彼は政治形態としてのファシズムの最終性を否定し、より高次の概念として国家社会主義を位置づけた。

④ 詩人福士幸次郎の地方主義ファシズム論。フランス伝統主義に影響をうけた彼は、熱烈な地方主義者であったがゆえに、国際的には国家・民族を世界における地方とみなした。

以上のように、連盟の主張は地方主義を基礎にするファシズム論と国家社会主義論で成り立っていたが、さらに『ファシズム』誌に日本主義論が登場するにおよんで、三者は対立し合い、理論的に連盟は空中分解をとげてゆく。

## KEY WORDS

fascist literature	ファシズム文学	regionalism	地方主義
national socialism	国家社会主義	regional fascism	地方主義ファシズム
Japanese spiritualism	日本主義		

## 1. 課題と視点

いわゆる急進ファシズム運動<sup>1)</sup>が全盛をきわめた1932年（昭和7年）、いくつかのファシズム文学運動が族生した。たとえば五日会であり、日本ファシズム連盟であり、国家社会主義文学同盟である。かつて筆者は詩人福士幸次郎のファシズム体験として日本ファシズム連盟をスケッチしたことがある<sup>2)</sup>が、一般的には直木三十五、三上於菟吉ら大衆作家による五日会の存在が知られているにすぎず、そもそも「日本にファシズムの文学運動は成立しなかったし、それはきわめて未熟なものでしかなかった」<sup>3)</sup>とも言われている。

日本におけるファシズムと文学の関係性（無関係性）は、「プロレタリア文学（運動）は日本プロレタリア文化（運動）のもっとも有力な構成部分であり、日本マルクス主義のもっとも重要な存在形態、その具体化・現実化の意味を持っている」<sup>4)</sup>というのに比べて、きわめて対照的に評価されている。しかし、「直木等のいはゆるファシズム文学はそれ〔押川春浪の軍事冒険小説をさす——筆者註〕に較べて遙かに大衆を吸引する力がなく、同時に文学的にも感服できぬものであったとはいへ、時代の先駆者の一人であったことは疑ひない」<sup>5)</sup>のである。この点に関して、ファシズムの組織者としての大衆作家の役割に注目する松本健一氏は、ファシズム体制とは大衆の政治的・経済的欲求不満を吸収してはじめて成立する政治形態であり、「そういう大衆の欲求不満を敏感に察知したのは、いわゆる純文学作家ではなく、中里介山や林不忘や吉川英治らの大衆作家なのであった。……大衆文学作家は、わがくにの資本主義体制の構造的矛盾を、その生活のうえに引き受けざるをえなかった大衆のエトスを代弁することによって、みずからファシズムのイデオロギーを体現していった。これに対して、いわゆる純文学作家たちは、その構造的矛盾を、まず、資本主義をもふくめた〈近代〉の閉塞状況として捉えた。」<sup>6)</sup>とのべている。

同様のことを日本ファシズム論の先駆者長谷川如是閑は次のように指摘していた。

「大衆は日本の社会の、資本主義的発達と、封建主義的残留物との交錯した影響の下に、彼等の感覚内容、感情内容を作り上げられて居るのである。大衆芸術は、それを把握している人間ではなく、さうした大衆性を構成している一分子なのである。かかる大衆分子が資本主義の封建化に依り、又その帝国主義的発展に依って、一定の典型を与へられたのが日本のファシズムである。……大衆文士のファッショ化は外部の勢力に対する迎合ではなく、彼自らの態度である。若し前後を言ふならば、芸術家のファッショ化は階級的、政治的ファッショの出現よりは、遙か先駆的であった。」<sup>7)</sup>

引用が続いたが、本稿は以上のような文学ファシズムの意味をさぐることを問題意識としつつ、当面の作業として、再び日本ファシズム連盟について検討する。というのも、ファシズム文学の先頭に立ったのは「直木、三上等の著名な大衆作家及び従来ブルジョア文学内において、さして重要な位置にあなかった小作家小理論家の一グループ」<sup>8)</sup>であり、後者こそ日本ファシズム連盟にはかならないからである。ここに山口定氏が示した五つの「ファシスト指導者層の歴史的諸類型」<sup>9)</sup>のうちの一つ、〈失意の文士・芸術家〉を求めることも可能となろう。

本論に入る前に、1932年のファシズム文学状況についてふれておこう。表1は各種の年表、目録をもとに作成したもので、到底不完全さはまぬがれないが、文壇におけるファシズム（文学）論議がこの年にピークを迎えていることがうかがえる。この間の事情を当局側資料をもとに見てみよう。当該期の出版状況、出版統制の実態を知るうえの一級資料である『出版警察報』（内務省警保局刊）はその時々の特刊の重要問題を取り上げているが、この年の2月～10月分に当たる41号～49号にそうした記載が全くないので、この時期の問題のとり上げ方の特徴は同じく内務省警保局の不定期刊行物『出版警察資料』の第4輯『ファシズムの理論』（1932年8月）と第5輯『出版物を通じて見たる日本革新論の現況』（1933年12月）に依らざるをえない<sup>10)</sup>。

前者は31年9月以降32年6月末までに内務省図書課に納本された出版物を基礎にして、「概説」「ファシズムに関する文献」「ファシズム諸団体の主張」「反ファシズム論」「ファシズムの一般的性質」および「ファシズム文芸論」の6章から成る。全235頁中31頁が

第 1 号 '32.3.1	創刊に際し天下に声明す ファシズムの弁証法(林癸未夫) 日本ファシズム早わかり ファシショ種々相(赤神良義) 海外資料 ファシスト党員の規律に関する規則 ファシズムに挙る諸家の声(伊豆凡夫他) ファシズム第一課(野島辰次) 早春ファシショ談(直木三十五) ベニト・ムッソリニ年表 ヒットラアを語る(陶山務) ファシズム成立の歴史 (イヴァノエ・ボノミ 東又清訳) アドルフ・ヒットラア年表 ファシズムを反動思想呼ば、りする の虚妄(福士幸次郎) ファシズム文学論(岩崎純孝) 日本ファシズム第一宣言 ファシショ三選(葛生貫) 連盟創立まで(的野鯨) 日本ファシズム連盟規約 創立雄記(野島)	擲弾敵所(松止澄) 旗は巻に翻る(葛生) ムッソリニは宗教を如何に観る か(G.ブレッツォーニ) 満蒙へ(水野六山人) ファシズム在京同志懇談会寸記 本部より同志へ きけ!刻々拡大強化する同志の声! 連盟本部より	農村は童話的だった(葛生) 闘争(水野) 連盟本部より 6 '32.8.5 天皇政治の徹底的実現 日本ファシズム連盟綱領 ファシズム教育論(林) 新日本国民同盟委員長は言ふ。 失業保険を論じ国家産業統制に及ぶ(高田文雄) ファシズム宣揚の歌 空疎なる「大日本主義」を嘆ふ(福士) 筆塵寸抄 伊国ファシズムの精神(椎名龍徳) 時局 筆陣録(城北隠士) 責任観念の覚醒を期せ(大森狼之介) 神武天皇の御雄図と豊内一渾の真 文明(田尻真人) 寸言妙音 無産党グラ幹の農村悪行記(的野) 街の拡大鏡 ファシズム成立の歴史(6) 郵便貯金より先づ公債を利下げよ(木口楠三) ファシズム芸術運動論アウトライン(野島) ファシズム文献紹介(富和) 我々の幸福は此処にある(彦九郎居士) 吾輩高原にて(水野) 農村教育愚見(早川生) 青春ファシショ行(葛生) 古書にきく 熱火の如き同志の声を!きけ全国に! 連盟本部だより
2 '32.4.1	ファシスト百言(福士) 日本独自の思想運動(井関孝雄) 比例的に発展せん(道家斉一郎) ファシズムと国民主義(林) 学問的公明を期せ(天川信雄) ファシズム座談会 階級闘争か民族闘争か(陶山) ファシスト労働憲章を觀る(小松見) 日本ファシズムとは何か 或る問答(福士) ファシズム第一課(野島) ファシズム文学論(岩崎) ファシズム成立の歴史(2) 新居格氏へ(岩崎) 仏蘭西ファシズム母体としての アクション・フランセーズ ファシズム瓦礫考(葛生) 閑居龍吉氏との会见(野島) 地方に挙る同志の雄叫び	4 '32.6.10 時局縦横談(城北隠士) 日本ファシズム連盟綱領 ファシスト百言(福士) 所謂国家非常の場合(福士) 共産主義を排斥しファシズムを謳歌す(林) マルクスの夢を追ふの愚を達かに止めよ(野島) 真剣に経済を建直せ(藤沢) 日本ファシズムを忘るな(野口雨情) 日本我の自覚を休得させよ(蓮生俊文) 總務共産主義の非現実性を暴く(高須芳次郎) 方法が誤ってゐる(赤神) 説教的思想善導効なし(加田哲二) マルクス主義の致命的欠陥(横川四郎) 国家節(野口) 十九世紀的の旧思想(三浦達雄) 理解して後に整流せよ(井上吉次郎) プロ文学価値なし(戸川貞雄) ファシズム文献紹介(富和) ファシズム文学論(岩崎) ふるさとの誇り(三木緋佐) ファシズム第一課(野島) 花の雲(水野) ファシズム成立の歴史(4) 自由を我等に!(葛生) 政党政治喝ばなし(的野) 人間製造(葛生) N・F・L同志茶話会記 齊藤内閣に呆れる(和田倫) 聴け!この力強い同志の声!! 連盟本部より	7 '32.10.15 青年ファシストの全国的奮起を望む 統制経済とは何か(井関) ファシショ六号室 昔ばなし ファシズム教育論(林) 神武天皇の御雄図と豊内一渾の真文明(田尻) 日本ファシズム連盟綱領 ファシズム旧号に就いて 連盟本部だより ファシズム(重要目次) 世界政治の帰着点(古谷栄一) いざゆかん歌(几平人) ファシスト漫談(野島) ファシズム文献紹介(富和) 伊太利ファシズム十周年に際して(東又) ファシズムと責任観念(長沼嘉四三) 五つの舟(葛生)
3 '32.5.1	日本ファシズム連盟綱領 日本ファシズム第一宣言 日本ファシズム連盟規約 ファシズム(重要目次) 智的愚昧を去れ(福士) ファシズム文献紹介(一)(富和四葉) 日本ファシズム早わかり ファシズム第一課(野島) ファシズムと国家社会主義(林) ファシズムを語る(上司小剣) 綱領について(一) ファシショの正しき認識(井関) ファシショ漫語(神田孝一) ファシズム成立の歴史(3) 鉄兜(福士) 綱領について(二) ファシスト労働憲章を觀る(承前)(小松) ファシズム文学論(三)(岩崎) ファシズムに対する希望(藤沢規雄) ファシストを名乗る所以(福士)	5 '32.7.5 日本ファシズム連盟時評 日本ファシズム「しきしまのみち」(豊田賢章) 公共善・国民道徳の根幹を養成せよ(池岡直学) ファシズム宣揚の歌 飢えたる農村の中を行く(的野) 農衰へて商疲る(永原外清) 悲惨!!農村の子供達(古川菊司) SOS!鐘は鳴る(大島辰雄) 早く救ってくれ(金指健次) 「豚の捨兒」哀愁曲(齊藤実行) 働けは損をする(小池てをを) 大手術が必要だ!(三神修) 人が一杯で米がない(北原美水) 農村救済を以て時局を断く打診す(田中清輔) 北肥後の農村から(能田太郎) 筆塵寸抄 ファシズム第一課(野島) 農村救済案私語(奥田雲蔵) ファシズム成立の歴史(5)	注:『ファシズム』誌は東京大学明治 新聞雑誌文庫に1~2号、法政大学大 原社会問題研究所に1~7号が所蔵さ れている。

唯一の個別テーマであるファシズム文学論にあてられたのは、この年のファシズム文学論議の過熱さを反映するだろう。ここでファシズム文学は「ファッショ・イデオロギーを内包せる文学及ファッショ的に行動する現実を、そのまゝリアルに描写せる文学」（209頁）を意味し、五日会、日本ファシズム連盟の結成によって「一つの文学運動として世人の耳目を聳てることゝなった」（212頁）と認識されている。しかし、「現在ファシズム文芸はイタリーを除いては未だ文学としての正しき形態をなしてゐない」（230頁）とその未成熟さを指摘し、「結局日本に於けるファシズム文芸の成立の可能は一種の傾向文学としてに過ぎず、而もその文学は発展性なき而も創造性なきものと見るのが妥当なる見解のやうである」（235頁）と結論づけている。

否定的評価にもかかわらず、一定の紹介・検討がなされた前者と異なり、後者（32年1月より33年1月末までの文献を対象）におけるファシズム文学運動の扱いは「文芸方面に於ても、ファッショ文芸運動の抬頭を見るに至り、直木三十五、三上於菟吉、久米正雄、白井喬二、吉川英治、岩田専太郎を中心として、五日会なるものを組織し、所謂ファッショ文学を唱へ、プロレタリア文学に対抗して居る。」（28頁、原文3行）とごく僅かである。これは33年に入ってからからのファシズム文学運動の退潮のあらわれであろう。しかし、日本ファシズム連盟（以下、連盟とする）は日本国家社会主義学盟、大日本思想研究会と並んで、「何れも国家主義、国家社会主義理論の研究、組織化に之努め、従来理論的背景の乏しい欠点のあった右翼団体に、理論的指導を与へ、相当見るべき活躍を続けて居る。」（27頁）と高い評価をうけており、ファシズム文学運動の一つの展開のしかたを示している。

## 2. 連盟の活動経過

「ファッショなる言葉が一の輕蔑の意味を持ってい」<sup>11)</sup>たせいか、急進ファシズム運動の全盛期でさえファシズムを自称した例はまれであった。連盟はその「嚆矢」<sup>12)</sup>と言われたが、管見ではその他に大日本生産党が機関誌『改造戦線』11号（1932年2月25日付）に社説「日本ファシズムを信奉する吾々日本ファシスト」を掲載したにとどまる。

司法省調査課による『司法研究』第19輯報告書集10「我国に於ける最近の国家主義乃至国家社会主義運動に就て」（1935年3月刊）を見ても、1934年10月現在の東京地方裁判所検事局管内291の国家主義団体がおしなべてファシズムと呼ばれるのを嫌い、自ら峻別し、その排撃さえ唱えていたことがうかがえる。

この背景には赤松克麿が言うように、「現在の日本は、ファッショを鵜呑みにすることが能ではなく、その特殊性を十分に検討し、長所を消化し短所を清掃する態度を必要として居る。だからわれわれは現実のファッショに対しては、あくまでも冷静なる批判者の立場を持してゐる。」<sup>13)</sup>という事情があったことが考えられる。それゆえ、名称にファシズムを掲げた連盟に対して、崇拜主義とか「不見識と不体裁」<sup>14)</sup>といった非難が向けられたのである。

以下、連盟の活動経過を跡づけてみよう。連盟は1932年1月20日に結成幹事会を開き、2月20日の第1回役員協議会で宣言・規約等を決めたのち、3月1日には月刊機関誌『ファシズム』を創刊し、約1000部を名界の知名人に郵送した。組織規模は同年12月現在で会員約40名、機関誌読者約800名と記録されているが、役員として以下の人物がいた<sup>15)</sup>。中央執行委員長野

島辰次（元『時事新報』記者，小説家，連盟事務所は東京都目黒区2-582野島方となっている），書記長和田倫（倫一ヵ），中央執行委員福士幸次郎，葛生勘了（貫ヵ），的野巖，妹尾亮吉，評議員早田登喜雄（弁護士），永井安雄，東又清，陶山務（哲学者），石村兵衛，安部孝吉，坂正逸（『時事新報』政治部記者），田中清之（章華社経営），上田光雄，長村養蔵，佐藤一英（詩人），永原清，林田英雄，高田文雄，赤岡一男，古川菊司。なお，第1回役員協議会には遠藤半八，岩崎純孝（イタリア文学者），吉田一穂（詩人），館野恕らも参加している。

さて，連盟創立に関する報道としては2月7日付の『東京日日新聞』学芸欄が早い。同紙は五日会結成と並んで連盟について，「日本ファシズム運動の指導的理論の確立をはかるとともに来る三月から機関誌『ファシズム』を発行して海外ファシズム運動の紹介研究をも併せ行ひ将来は軍部その他とも連絡をとって全国的ファシズム運動の波をまき起す事となった」と記している。『ファシズム』1号（3月1日付）掲載の的野巖「連盟創立まで」は創立の動機として五日会の軍部接近をあげ，当初的野らも軍人グループとの提携をめざしたが，野島が「軍部に会ふ前に我々は日本ファシズム運動といふものに一つ理論づけ，組織を作らうぢやないかと言ふので，先づ『ファシヨ研究』と呼ぶ研究雑誌を出そうと言ふことになり，さらに誌名が「學術雑誌見たいで不可なく，モット強く『日本ファシズム連盟』を組織して『ファシズム』と呼ぶ機関紙を発行して一般日本大衆の血に吸ひかけ」ようということになったと説明している。

三上於菟吉，直木三十五ら五日会の公然活動は2月5日の陸軍桜会メンバーとの会合からであり，連盟創立より若干おくれるが，始動は前年の秋頃であった。参加者の一人佐藤八郎（サトウ・ハチロー）が「下話は昨年の11月ごろから三上氏を中心に行はれていたもので正月に入ってから具体化して来たのだ，私としては勿論賛成だしこのグループに喜んで入ってゆく，父（佐藤紅緑氏）にも話して賛成を得父も入会する筈だ」<sup>16)</sup>とのべていることから，紅緑・八郎親子と極めて密接な関係<sup>17)</sup>があった福士幸次郎の耳にこれらの動向がすでに入っていたことも考えられる。

福士のファシズム傾斜は前稿でも指摘したように，高島素之との論争が契機であった。「昭和二年頃ですか——その頃の社会主義の連中の間にファシズムに対する色々な理論が出ました。高島君なんか，その頃からファシズムに理解を持ち，その高島君などと論争して，私もその頃からファシズム的な傾向になったと云ふ訳です。」<sup>18)</sup>ムッソリーニに関心を持っていた福士は，1927年高島の「ムッソリーニズムと国家社会主義」（『大調和』8月号）に対して12月14日付『読売新聞』に「高島素之氏を駁す——ムッソリーニは皇室中心主義——」を載せ，高島の反論23日付同紙「福士君の場所錯誤——ムッソは非『皇室中心主義』——」に対して25～28日付同紙「高島素之君に——ム氏は共和主義か——」で応戦した経歴を持っていた。

ところで，連盟の名称が不評を買ったことは先にふれたが，そのファシズム理解自体も問題であった。後述するように，ともに日本国家社会主義学盟の組織協議のテーブルにつくことになる日本社会主義研究所でさえ，「『日本ファシズム』？『軍部と提携して』？その志しや宜し。がその不見識や嗤ふべしだ。ヒトラーの言じゃないが，『ファシズム』は伊太利特有のものであって，採って以って日本に行はるべきものではない。」<sup>19)</sup>と批判し，連盟内部にも意見の相違が見られた。

3月12日の「ファシズム座談会」（『ファシズム』2号，4月1日付）の席上，連盟を

代表して妹尾亮吉が「民族精神即ち日本人意識の下に国家社会主義を行ふと云ふことが日本ファシズムの結論ぢやないですか」と主張したのに対して、匿名博士（後出の林癸未夫と思われる）が「妹尾さんの云はれた様にファッショだけではいけないと思ひます。つまり国家社会主義を綜合する一つ的手段として、やると云ふことでなければ、ほんとの意味はないと思ふのです、……ファシズムと云ふ政治形態の中に社会主義と云ふ組織を盛ると云ふことでなければならんと思ふのです」とコメントし、妹尾は「先生の御説ではファシズムの本質の中に民族精神の強調と云ふものが云はれてないと思ひます」とやんわり反論している。この場は匿名博士の「日本のファシズムは、ドイツやイタリーの模倣であってはならない。あくまで日本的なファシズムでなければならぬ。……だから国民主義——それに縁故のあるものと考えているのです」という説明で落ち着いたものの、ファシズムと国家社会主義との関連についてあいまいさを残した。

同じく席上、「若しファシズムのイデオロギーがあり、そのイデオロギーの指導原理があってそれによって進むことが出来れば、プロレタリア文学の失敗を繰返すことなく進み得る」とファシズムによる文壇のヘゲモニー獲得を期待する戸川貞雄（小説家）に対して、文芸誌『不同調』時代の同人仲間でもあった野島は「吾々のファシズムと云ふものは、そんな風に小さなものでなく所謂国民主義的と云ふ——全体主義なんです。文学者などは、書齋にトジコモって、積極的な動きと云ふものが無いんじゃないかと思ふ」とたしなめている。野島の政治関心は『不同調』創刊号（1925年7月1日付）の「創作家への注文」で、「もっと文芸上の問題以外にも、その意見を吐いて貰ひたい、……。社会問題なり思想問題なりに対して、もう少し積極的に出て、感想を発表して貰ひたい」と示されずみであった。

さて、3月23日には「ファッショ防衛大協議会開催」の報道をめぐり、野島と福士が文部省社会局長関屋龍吉と会見し、「文部省はファシズムに対して決して無理解な防圧など加へやうとしているものでない事実を確認」している（野島「関屋龍吉氏との会見」、『ファシズム』2号）。

4月5日には早稲田大学大隈会館で行われた日本国家社会主義学盟組織協議会に日本社会主義研究所、行地社、全国労働大衆党、社会民衆党、日本国民社会党準備会、社会青年同盟などとともに参加し、同月18日の学盟発会式では林癸未夫が幹事長に、福士が市民対策部委員に就任した。

同月22日、5月13日に在京同志懇談会が開かれるが、6月11日、前日発行の『ファシズム』4号が発禁処分となった。連盟は結成当初より理論活動を重視し、テロリズムに否定的であったが、同号掲載の和田倫「斎藤内閣に呆れる」中に、「第二第三の（血盟団）や（青年将校）を必要とすることは論をまたない。……（暗殺事件）それは日本改造の為の一つの進歩だ」<sup>20)</sup>（カッコ内伏字）という直接行動肯定の筆致が見られたからである。

また同月、連盟幹部は「救農議会」（8月、第63臨時議会）を前に山梨・埼玉・富山の各地方を遊説し、その報告が『ファシズム』6号（8月5日付）に掲載された。ここで連盟に対する各地の反応をまとめておこう。

『ファシズム』毎号に読者投書欄があり、北海道・東京・山梨・岡山など18道府県より投書が寄せられている。その中には、ファシズム小説を掲載する方が「読者の頭に論説以上の鮮明なる意識を表しはしないか」、同志拡大のために「連盟宣揚を最も農民、主に青年層に解り安くした原稿をお送り願ひたい」という注文のほかに、「ファシズム対マルキシズムの腕競

べを機関紙にて御指導下さる様御願ひします、今日の我々に取てはマルキシズム排撃の必要が最も痛感されます」との声があり、連盟側は「共産党にまつはるいろんな事実やそのために生じた悲話哀話も地方には相当沢山あるだらう、さういふ資料をどしどし送って貰ひたい」と反共感情のはけ口を買って出ている。

『ファシズム』5号（7月5日付）は連盟の指導的人物を北海道・群馬・埼玉・山梨・長野・静岡・愛知・石川・三重・兵庫・岡山・広島・福岡などにわたってあげている。この中で多少事情を知りえるのは山梨県の場合である。内務省警保局『特高月報』の6月分運動日誌によれば、「6月15日山梨県中巨摩郡大井村長沼嘉四郎外2名は本年3月より好奇心にて『ファシズム』を購読中なりしが、突如日本ファシズム連盟本部より電報あり、同日本部常任書記の野巖來訪して極力支部結成を勧誘する所ありたり」とあり、遊説が支部結成をめざしたものであることがわかる。これ以前、連盟から宣言書100部が送られていたこともあって、下地はできていたといえよう。

山梨県は長野、群馬両県と並ぶ農村ファシズムの重要基盤であり、平野力三率いる右翼的農民運動＝日本農民組合の本拠地であった<sup>21)</sup>。社会民衆党山梨県連の役員でもあった平野はこの年2月はじめ、間近に迫った第18回総選挙を控えて全国労農大衆党県支部と共同候補擁立について協議しており、1月17日の日本国民社会党結成懇談会で同席した林癸未夫を高橋亀吉、北沢新次郎に次ぐ第三候補に推している（交渉は失敗<sup>22)</sup>）。なお、その後平野は4月の社会民衆党分裂の際、赤松克麿らとともに脱党して国家社会主義新党準備会を作り、5月29日の単一国家社会主義政党国民日本党結党式の分裂を経て、赤松派の日本国家社会党に至る。このような平野の態度を連盟や山梨支部は御都合主義と批判した。

さて、8月に入って連盟叢書刊行の第一弾として野島の『日本ファシズムとは何ぞや』や、林が章華社から4月に出した『国家社会主義原理』の普及版の案内を『ファシズム』誌に載せ、連盟は理論強化に努めようとしたが、9月発行予定の『ファシズム』7号は休刊した。「体が二つあっても足りない、……犠牲にすべき自己にも、相当の生活上の憂苦と、労務が残っている」（編集後記）と弁明しつつ10月15日に再刊された第7号は、紙面を16ページから10ページに縮小し、価格も20銭を10銭に下げた。

現在、8号以降の『ファシズム』誌は見当らず、内務省警保局『出版警察報』51号（1932年12月刊）では納本ナン、同63号（33年12月刊）では廃刊と記されている。また、同『社会運動の状況5』の「地方的国家主義団体調」および協調会労働課『昭和8年に於ける社会運動の情勢』の「愛国団体一覧」（ともに33年12月調）には連盟の名が見えるが、前出「我国に於ける最近の国家主義乃至国家社会主義運動に就て」では、1934年4月15日解散となっている。

このように、連盟はしばらく存続したようであるが、1932年夏をもって「春のはなやかりしジャーナリズムの跳躍から、秋のみじめなる低迷へ」<sup>23)</sup>とファシズム熱が冷却化し、日本主義派のファシズム批判が高まる一方で、『ファシズム』誌が停刊し、連盟内の詩人グループである富士、吉田、佐藤らは10月に季刊詩誌『新詩論』<sup>24)</sup>を創刊してゆく。ファシズム理論の研究という連盟の中心活動は、ほぼ年内に終了したと考えられよう。

年 月 日	掲 載 誌	執 筆 者	題 名	年 月 日	掲 載 誌	執 筆 者	題 名
1927. 9	新 潮	岩 崎 純 孝	ファシズム芸術論	1932. 4	農 本 社 会	茨木隆(大田卯)	ファシズムと文学
1930. 3	文 学 時 代	"	伊太利文芸界の古典主義	4	読 売 新 聞	小 林 多 喜 二	弁証法の無慈悲、ファシズム文学の運命について
1931. 4	新 潮	岩 藤 雪 夫	ファシズム文学批判	4.7,8,10	国 民 新 聞	貴 司 山 治	ファシズム文学に就て
11	新 興 民 族	羽 田 義 則	民族主義芸術の発展とその進展方向	5	新 思 潮	中 村 哲	ファシズム文学の展望
11	"	藤 井 貞 澄	最も尖端的な日本民族主義の特長とその芸術	5	新 日 本 文 芸	長 岡 鉄	文壇ファッショを一蹴す
12. 5	文 学 新 聞	(展 望 台)	ファッショ文学現はる!	5	思 想 問 題	新居格・千葉亀雄	ファシズムと文芸
12.14	帝国大学新聞	黒 島 伝 治	ブルジョア作家のファッショ化	5	改 造 戦 線	不 垣 貞 一	日本主義芸術へのテーゼ
1932. 1	プ ロ ッ ト	久 保 栄	ファッショ人形	5	新 潮	(特 集)	諸外国のファシズム文学
1	社会運動通信	青 野 季 吉	ファシズムと文学	5	"	徳 永 直	農民連盟派のファッショ文学
1. 7	読 売 新 聞	三 上 於 菟 吉	僕の傾向梗概―軍部と僕―	5	セ ル バ ン	吉 村 鉄 太 郎	日本のファシズム文学
1. 8	"	直 木 三 十 五	ファシズム宣言	5	"	土 田 杏 村	ファシズムの思想的基盤
1.20	文 学 新 聞	(展 望 台)	ファッショ文学と労働者の文学	5	日 本 国 民	(座 談 会)	ファシズムと文芸
1.28-30	時 事 新 報	宮 本 百 合 子	ブルジョア作家のファッショ化に就て	5	プロレタリア文学	東 儀 太 郎	社会ファシズム文学の共同戦線
1.30-31	朝 日 新 聞	"	現実逃避の文学―神秘主義とファシズム―	5	大 陸	直 木 三 十 五	早春ファッショ談
2	プロレタリア文学	寺 島 一 夫	ファシズムの抬頭と文化反動との闘争	5.12	都 新 聞	大 伴 真 弓	国粹文芸に就いて
2	中 央 公 論	徳 永 直	小説 ファッショ	5.一	福 岡 日 日 新 聞	伊 福 部 隆 輝	ファシズムと文学
2.4-5	東京日日新聞	岩 崎 純 孝	海外ファシズム文学を訪ねて	6	三 田 文 学	芳 賀 敏	戦争・ファッショ・文学
2.10	大 衆 の 友	中 野 重 治	ファシズムの抬頭	6	"	原 実	ファシズムと藤村の「夜明け前」
2.15	プロレタリア詩	佐 野 巖 夫	ブルジョア詩人のファッショ化	6	プロレタリア文学	坂 井 徳 三	社会民主主義「文壇」のファッショ化
2.20	文 学 新 聞	三 木 広	ファシズムの五日会を葬れ	7	新 潮	麻 生 義 輝	ファシズムの芸術論
2.23	万 朝 報	三 枝 健	文士のファッショ化	8	"	(座 談 会)	日本文学と海外文学との交流について
2.25	河 北 新 報	吉 川 英 治	ファッショ文学への出発	9	"	近 松 秋 江	安価なるファッショ文学
3	新 刊 批 判	長 谷 川 万 次 郎	芸術に於けるファッショ	9	生 命 線	間 法 師	国民主義文芸陣眺望
3	新 潮	土 田 杏 村	ファッショと文芸	10	思 想	今 中 次 磨	文化思想に現はれたファシズム
3	"	長 谷 川 如 是 閑	芸術の反動性に就て	11	マルクス主義の旗の下に	マフロフスキー	文化ファシズムの根本特徴
3	大 陸	吉 川 英 治	ファッショ文学への出発	1933. 2	新 潮	新 居 格	文学界の現状を論ず
3. 1	時 事 新 報	宮 島 新 三 郎	ヒステリ性ファシズムの反動(文壇ファシズムの発展と批判を見るか)	7	国 民 運 動	日 高 基 祐	日本主義文芸への考察
3.4,6,7	東京日日新聞	須 藤 武 一 郎	ファッショ文学運動(戦争と文化と思想)				
3. 8	読 売 新 聞	前 田 河 広 一 郎	ファッショは流行る				
3.11-13	"	徳 永 直	ファシズム文学の本質				
3.14	万 朝 報	森 下 日 吉	所謂ファシズム文学の解消を促す				
3.27	朝 日 新 聞	青 野 季 吉	星霧説時代―迷児のファッショ文学				
3.27	時 事 新 報	大 宅 壮 一	バラック街のファッショ文芸陣				
4	黒 色 戦 線	新 居 格	ファッショ文学の正体				
4	月 刊 批 判	長 谷 川 万 次 郎	芸術に於けるファッショ				
4	文 学 時 代	千 葉 亀 雄	ファシズムと文学				
4	新 潮	(座 談 会)	ファッショとファシズム文芸に就て				
4	"	中 村 武 羅 夫	所謂ファッショ化の事象の探求とプロレタリア文学の完全なる改竄				
4	短 歌 月 刊	(巻 頭 言)	歌壇とファシズム				
4	プロレタリア文学	窪 川 鶴 次 郎	ブルジョア文学の新たな段階に面して				
4	祖 国	岩 崎 純 孝	ファシズムの文芸				
4	"	永 田 衛 吉	日本ファッショ文芸の察見				
4	改 造 戦 線	影 山 正 治	所謂ファシズム文学の問題に就て				
4	"	松 本 博	日本主義文化運動の確立へ				

出典：内務省警保局編「出版警察資料」第4輯「ファシズムの理論」第2章「ファシズムに関する文獻」、同第5輯「出版物を通じて見たる日本革新論の現況」巻末「日本革新運動に関する文獻」、「昭和批評大系1(昭和初年代)」、「年表」(番町書房, 1978年)、など。



### 3. 連盟のファシズム論

前出の『出版物を通じて見たる日本革新論の現況』は連盟を「純正日本主義右翼革新団体」と分類しつつ、その綱領は実質上国家社会主義であると認定している。同書は日本主義と国家社会主義の対立を基本認識としていたから、連盟の存在はその認識の狭間にあったといえよう。連盟の内部矛盾は『ファシズム』誌面に明らかであり、海外ファシズムの紹介・推賞からはじまり、蓑田胸喜、田尻隼人、池岡直孝、高須芳次郎といった天皇主義、日本主義まで雑多であった（表2参照）。ここでは、連盟を代表すると思われる代表的ファシズム論を以下の四人に見ていきたい。

#### A 岩崎純孝のファシズム文学論

連盟の芸術観は綱領に「我等ハ国家並ニ民族精神ヲ分裂弛緩セシムル一切ノ芸術ヲ排撃シ進メ国民精神ノ振興ヲ目的トスル国民主義芸術ヲ高唱シ之ガ普及ヲ期ス」と示されているが、『ファシズム』誌上で具体的に論じたのは岩崎純孝であった。彼は『ピノキオ』『クオレ』などの児童文学や、ファシスト詩人ダヌンツィオの『死の勝利』の翻訳で知られるイタリア文学者であった。

すでに1927年、『新潮』9月号に「ファシズムモ芸術論」を発表した彼は、ムッソリーニを賛美しつつ、左翼文学論対芸術派文学論の対立時代における第三文学論として、サルヴァトーレ・ガットオ Salvatore Gatto を中心にイタリア・ファシズム芸術論を紹介していた。その後も、アントニオ・ベルトラメルリ Antonio Beltramelli のラドゥーノ運動やクルツィオ・マラパルテ Curzio Malaparte のストラパエーゼ運動<sup>ネオバトリオティズム</sup>といった文学運動を推賞し、文壇ファシズムの今後は満州事変によって生まれた「新興愛国心」の発展次第であろうとのべていた<sup>25)</sup>。

『ファシズム』1～4号に「ファシズム文学論」を連載した彼は、ファシズム文学の要素として次の15点をあげている。

①地方主義②伝統主義③民族主義④愛国主義⑤古典主義⑥英雄主義⑦精神主義⑧反唯物主義⑨反マルキシズム⑩個性尊重⑪人間主義⑫反国際主義⑬ファシズム政体の謳歌宣伝⑭反ファシズム及反ファシストの排撃⑮ファシズムの宣伝

中でも①の地方主義を重視していた。イタリアにおいても、マラパルテが首都ローマのファシズムに対して「歴史、民俗、芸術、経済の構成体である諸地方を代表し、イタリア人の民衆的な郷土の感情、寛大で偏見のない感情を表現している」地方ファシズムの闘争宣言をした<sup>26)</sup>が、岩崎は地方主義の発祥を1927年のベルトラメルリのラドゥーノ運動に求め、「如何なる国も各地方々々に依って成立している。従って各地方々々の伝統、各地方々々の文化的特色を発揮した芸術は、取りもなほさずその国の独特な芸術となる」「従って、ファシズムその物の民族主義、愛国主義に重大な連関を持って来るが故に、地方主義精神は実にファシズムに取って欠くべからざる一要素と見なされる」とのべている。

この頃、日本文芸界においてラドゥーノ運動はイタリア・ファシズム文学の核と見られており、1930年5月に新潮社より発行された『世界文学講座12・現代世界文学篇上』でも「是は大きく見れば、伝統主義運動であり、小さく見れば地方主義運動である」と紹介され<sup>27)</sup>、また、プロレタリア文学側からはムッソリーニの文芸政策として批判を浴びていた<sup>28)</sup>。

ともあれ、地方主義を軸としたファシズム論は前稿で見た福土の場合と共通するものであ

り、15の要素を合せもつファシズム文学を岩崎は次のように定義している。

「ファシズム文学は、日本の地方に根ざせるオリジナリティの文学、日本の伝統の持つオリジナルな意識の文学、日本民族のオリジナルな精神を反映する文学、日本国家発展を期する愛国主義的精神を描く文学、然もその場に立つヒロイズムの文学、更に資本主義制度の悪弊を打破し、国民的自覚、国家主義的意識のもとに於て、小なる階級闘争に狂奔する労働者階級を覚醒せしむる文学、然も個人慾一階級慾を否定する文学でなければならぬために、時には野蛮性を持ち、時には献身的犠牲性を有ち、時には死を撰ぶ英雄の個性を生かし描き上げ、文章の簡潔、スタイルの明白、語彙の明瞭、描写的確、無意味なる形容詞の排除を、その形式に要求する。」

以上、岩崎のファシズム文学論は前出『ファシズムの理論』にも数多く引用され、当局の認識を形づくる一因であった。しかし、彼自身はそのファシズム論の受容のされ方に満足していたわけではなく、「プロレタリア・イデオロギイの宣明」としての地方主義の側面の軽視を指摘し、「ただ現代における世界の国家的対立の先鋭化に伴ひ、愛国的な国家主義の立場、民族愛的強力国家への道程が、ファシズムの第一義的観念として一般に強く認識されている事が、根本の誤謬なのである」とその過度の国家主義化を戒めた<sup>29)</sup>。

#### B 野島辰次のファシズム論

委員長の野島は元『時事新報』の記者であり(1920～26年)、1925年7月から29年2月まで続いた文芸誌『不同調』の同人であった。『不同調』は「文壇に出遅れ、不平分子の立場におかれていた」ものたちの集りであり、「同人たちの執筆も評論ならぬ雑文が多く、小説も読むべきものがない」といわれる<sup>30)</sup>が、野島もほとんど無名であり、連盟創立にあたって他の同志にくらべ「自分なんかルンペンかも知れない<sup>31)</sup>」と心境を吐露している。

彼のファシズム論は『ファシズム』1～5号に「ファシズム第一課」として展開されている。まず、ファシズムは「或る意味に於いてマルクス主義から出発し……マルクス主義を正當に理解し、ここを起点として新たに生じた」とのべ、マルクス主義者からの反動批判に対しては政治形態の刷新、超階級主義、採長補短主義、非・武力強制主義、反資本主義をもって反論している。

彼にとって正統な日本ファシズムとは、民族主義、国民主義、国家主義の統一隔合体、即ち日本民族、日本国民、日本国家を包容するべく然とした全体主義なのであって、「吾々日本人、吾々日本国民が、日本人であるといふ民族意識、日本国民であるといふ国民意識をハッキリ認識し自覚し、さういふ認識と自覚とに立脚して、吾々のこの日本をいかに更生せしむべきか、それがわかれば、そして、それが出来れば、それだけで結構なのである。充分なのである」とのべるように、ファシズム＝「一大国民運動」(『ファシズム』1号、「日本ファシズム早わかり」)論の立場であった。もっとも、野島の論は他の革新右翼から「空理を退け、空理ばかり言っている……もっと地味に、国民主義とでも言ったら如何」<sup>32)</sup>と批判をうけるが、そのマルクス主義観とも相まって、国民間の潜在的反体制エネルギーを擬似革命的に引き出し、ファシズム・イデオロギーへと転換する立場は素朴な「国民の元気」論<sup>33)</sup>といえよう。

なお、彼自身自覚するように、国家社会主義との関連は不鮮明であり、「日本ファシズムは、その綱領にも掲げてゐるやうに、国家統制に拠る経済形態の確立を期してゐるが、その内容が例へば国家社会主義と呼ばれてゐるものと、ピッタリ合致するかどうかは疑しい」、その

鍵は国家社会主義における民族性、国民性の認識次第であるとした。

作家であった彼は岩崎同様、ファシズム芸術についても論及している。「青白きインテリ文学青年に与ふ」と題した『ファシズム』6号掲載の「ファシズム芸術運動理論アウトライン」がそれである。ここでは日本ファシズム芸術も民族主義、国民主義、国家主義を前提にするとして、「(1)リアリズムの芸術である。日本ファシズムが現実の必要から生まれたものであるから、その芸術も亦リアリズムでなければならない。(2)民族主義、伝統主義、愛国主義の芸術である。(3)精神主義の芸術であり、反唯物主義の芸術である。」とのべているが、岩崎ほどには具体的でなく、この点における野島自身の実践も確認できない。

### C 林癸未夫の国家社会主義

月	掲 載 誌	題 名
2	思 想 統 制	ファシヨの政治形態
3	国 本	ファシズムの本質と日本の将来
4	報 知 新 聞	国家社会主義へ（28日付）
5	日 本 国 民	日本国民社会の発展原理
5	大 陸	社会不安とファシズム
5	経 済 往 来	国家社会主義と国民社会主義との異同
5	外 交 時 報	国家主義、国民主義、国際主義
6	国 家 社 会 主 義	国家社会主義とは何ぞや
6	政 界 往 来	国家社会主義運動の進展
7	国 家 社 会 主 義	国家社会主義者の国家観
8	〃	国家社会主義と統制経済
9	〃	非社会主義的統制経済は可能なりや
10	〃	国家社会主義と私有財産制度
10	経 済 往 来	権藤成卿氏の思想を検討す
11	生 命 線	国家社会主義の真髄
12	早大政治経済学雑誌	国家主義と社会主義

注：①『ファシズム』掲載分は表2を参照 ②著作物として、『国家社会主義原理』（章華社、4月）、『国家社会主義と統制経済』（日本国家社会主義学盟〈前衛閣カ〉、7月）がある。

発表しつつ、『社会政策新原理』（早稲田大学出版部、1926年）、『社会問題各論』（日本評論社、1929年）、『工業経済概論』（巖松堂、1930年）を出す。そして1932年、表3が示すようにすさまじい勢いでファシズム、国家社会主義について発言し、その「理論的代弁者の代表的存在」<sup>35)</sup>、「ファシヨの波頭に躍る人々」<sup>36)</sup>の一人となっていくた。

経済学者の彼が文学ファシズムに接近した経過は定かでないが、彼は1926年から28年にかけて『新潮』『文芸春秋』『経済往来』『文章倶楽部』で文学論を展開し、プロレタリア文学を批判していた。『不同調』にも二篇寄稿しており、このあたりで野島と接触したのではなかろうか。

さて、彼のファシズム論、国家社会主義論については『国家社会主義原理』（章華社、1932年）および『国家社会主義論策』（章華社、1933年）にほぼ網羅されているが、ここでは『ファシズム』掲載論文に沿って見ていきたい。

岡山県生まれの彼は1905年早稲田大学法学部を卒業し、古河鉱業会社で労働問題の調査研究に従事した後、21年から早大政治経済学部で社会政策・工業政策を教えていた（23年教授、27年経済学博士）。彼についての研究はほとんどないが<sup>34)</sup>、現在判明した限りでの彼の執筆活動を見てみると、1921年8月から24年4月にかけて民本主義の牙城として全盛期を迎えていた『中央公論』にほぼ毎月ヨーロッパの労働問題について寄稿しており、それらは『産業民主主義運動』（同人社書店、1922年）、『国際労働運動史』（早稲田大学出版部、1923年）にまとめられている。その後、『早稲田政治経済学雑誌』に論文を

彼のファシズム観は先にふれた野島や後述する福士の〈ファシズム＝運動〉論とは異なる〈ファシズム＝形態〉論に立っていた。彼は社会発展に関する独自のキー概念「綜合弁証法」をもって、デモクラシー（ブルジョア独裁）をテーゼ、ボルシェヴィズム（プロレタリア独裁）をアンチテーゼとして、ジンテーゼたるファシズムを導き出す。ともに「量的政治」「大衆独裁」とされる二つのテーゼから「最も聡明にして且最も優秀なる少数者の独裁」へと政治制度の「量から質への転化」をはかろうとする点に、議会政治の否定、エリート理論、大衆蔑視といったファシズム思想の特徴を指摘できよう。しかし、彼にとってファシズムは「現代の社会的禍害、国民的災厄を救ふべき唯一の必然的政治形態」であったものの、最終的な福音ではなかった。「私はファシズムが恒久不変の政治形態たることを主張するものでは決してない。それは他の一切の社会制度と同様に歴史的、過渡的存在に過ぎないことは勿論である。」（以上、『ファシズム』1号、「ファシズムの弁証法」）

ここにファシズムと国家社会主義の関係が問題となってくる。彼は両者ともに「超個人的、超階級的イデオロギー」ということでは共通点を持つが、前者の労資協調主義は後者にとって「遺憾」な点であった。彼はのべる。「日本のファシズムは……その政治形態に於てはイタリーに学ぶところが多いとしても、経済組織に於ては労資協調主義に低迷することなく、断然社会主義に向って邁進すべきである……その時ファシズムと国家社会主義とは事実上同一物となり得る」と。また、「ファシストが真にその目的とするところに忠実であり又その手段に於て適切であらんと欲するならば、結局それは国家社会主義に到達せざるを得ないものである」とのべ、国家社会主義をファシズムより高次の概念としてとらえていた（以上、『ファシズム』3号、「ファシズムと国家社会主義」）。

イタリアにおける協調組国家体制、即ちコルポラティズムについては最近の研究<sup>37)</sup>に学びたいが、国家社会主義派においてその評価は低かった。林はイタリア・ファシズムの経済統制では「資本主義の害毒を除去することの到底不可能」なことを説き<sup>38)</sup>、ある論者は「ファシズムとの闘争」を宣言した<sup>39)</sup>。

なお、林の国家社会主義論における「国家主義」の性格を論じた竹山護夫氏は、国家社会主義は社会主義を「普遍原理としての『総合的象徴』の可能態からパティキュラーな『総合的象徴』の可能態へと転化させることを課題としていた」が、「『国家……主義』が、『日本主義』と分離して実質上においても『国家主義』となる時」、それは普遍原理の可能態である「国家主義」と「社会主義」との結合、「一つのユニヴァーサルと今一つのユニヴァーサルとの結合」を意味した<sup>40)</sup>、と指摘している。林の平易な表現を借りれば、天皇制の一点を除けば「国家社会主義とその哲学的背景をなすところの綜合弁証法とは、ひとり日本国民に独占すべき原理ではない」<sup>41)</sup>ということであろう。林におけるこの普遍性、世界性は次に見る福士のファシズム論にも関連してくる。

この年における彼の実践についてもふれておこう<sup>42)</sup>。前述したように、彼は1月17日下中弥三郎らの日本国民社会党結成懇談会に参加し、準備員として活動しつつ、3月29日日本国家社会主義学盟結成を提唱、4月18日の発会式で幹事長に選ばれた（6月、早大学長より実践活動について注意を受け、11月の学盟改組で顧問になる）。下中らの新党結成運動は社会民衆党から脱党した赤松克麿一派の国家社会主義新党準備会と合流して5月29日に国民日本党結成の予定であったが、当日分裂して、下中派は新日本国民同盟、赤松派は日本国家社会党を組織する。林は「新日本国民同盟に参加するものに非ざるも、其の理論的立場がこの同盟に加入せる

者と共通する」と下中派と目され、翌33年1月の同盟主催「新興国民大学」でも講師をつとめているが、日本国家社会党系の日本労働同盟（32年11月創立）や、退役将校と平野力三らの日本農民組合が合流した皇道会（33年4月結成）の顧問をつとめるなど、国社派全体の中心イデオログであった。

#### D 福士幸次郎の地方主義的ファシズム論

詩集『太陽の子』『展望』などの口語自由詩で知られる福士幸次郎が、伝統主義・地方主義の立場からいかにファシズムへ傾斜していったか、という問題については前稿でのべた。それをつづめて言うならば、詩作の中でフランス 伝統主義に影響をうけ、モーリス・バレス Maurice Barrès やシャルル・モラス Charles Maurras に学ぶことで、モラスや彼の率いるアクション・フランセーズに多くを学んだムソリーニへの関心を強めていったのである。

福士は告白する。「終始、私は独りだった。……困難な廻り路をして来たのである。そして、遂に自分の考へと一致するファシズムにたどりついたのだ」（『ファシズム』4号、「N. F. L同志茶話会記」）そして、「民族間に於ける各地方人の分派」<sup>43)</sup>を承認する地方主義者は「世界に於ては世界各民族の民族的特質」<sup>44)</sup>を承認する民族主義的ファシストであった。

第一に無条件的祖国愛を求めた。「人がその国——祖国——を愛するのは、その国が良いからと云ふので愛するのでは無い。さういふ良し悪しの評価観念を超越して、単にその国に人が生を享け、国の心を享けたといふ関係一つを以て、愛せざらんとしても得ずして愛するに外ならない。」（『ファシズム』2号、「ファシスト百言——小生忝個の私言」）

第二にアジア主義・東亜協同体論を批判した。「民族意識に正当に、純粹に立てば、この意識の具体物たる伝統、風習、趣味の三要点より見て、王道主義など云ふものは到底認められる事では無い。それは之れ等の区別を無視して、東洋といふ世界の一局部の地理的關係から味噌も何とかも一緒にしようとする主義精神で、吾れ等特有の民族意識を混濁し、引いては民族生活の破壊とも成るものだ云ひたい。」（『ファシズム』3号、「ファシストを名乗る所以」）

第三に民族自決的発想に立脚した。「民族の問題は……皆それぞれに特殊である。民族社会の統制の根拠物がそれぞれに特殊だからである。問題の解釈は従ってその民族だけに負はされるところで、民族独自の努力に独り関る」（『ファシズム』1号、「ファシズムを反動思想呼ばふりするの虚妄」）

このように、「大日本主義」(Pan-nipponism)を嗤った「周辺の」ファシスト 福士は、一方で国本社をはじめとする既成の革新右翼、満州事変を契機にファシ化を強めた無産政党、時局便乗的な大衆文士らを批判しつつ、他方では国家社会主義者における伝統、民族観念の軽視を指摘して、「諸君は国家とは云ひなが」も未だマルクスの尻を舐めた味が忘れられないのだ」（『ファシスト百言』、「ファシズム」4号）と攻撃した。この姿勢は以後も変らぬものであった。

#### 4. 連盟の行方

「雑多なファシイック的思想も、国体論的日本主義を中核にして、次第に整備、統制されてい

った」<sup>45)</sup>といわれるが、『ファシズム』誌面も高須芳次郎（大日本思想研究会）、蓑田胸喜（原理日本社）、田尻隼人（錦旗会）、池岡直孝らの登場によって「しきしまのファシズム」<sup>46)</sup>の様相を呈し、高須は同誌を日本主義系と分類した<sup>47)</sup>。また、蓑田の「伊太利亜がムッソリーニの如きを要したのは法王と帝王との相争ふ国で、そこに『現人神』がないからである」<sup>48)</sup>というファシズム批判は福士、岩崎らと真向から対立するものであったろう。福士はのちに「吾々の勢力が微力で結局この方面の人々〔日本主義者・皇道主義者——筆者註〕に今日の日本は引き摺られて仕舞」<sup>49)</sup>ったと回顧しているが、誌面の分裂とともに地方の活動家にも困難さが自覚されてきた。

「ファシズムが如何なる主義であるかといふ事は知らないまでも、時代の問題として、重要な役割を演じつゝある事を、世間の人は臆げ乍らも知ってゐるものと思つてゐた。が、一度が連盟員となり、勢力拡大に著手するに及んで、事実はこの予想を全然裏切れるを知り、社会の動向に関心を有つ者の、余りに少なきに驚いた。」（『ファシズム』7号、長沼嘉四三「ファシズムと責任観念」）

先にのべたように、連盟は1932年いっばいで実質活動を終了したと考えるが、その最大の原因は中心活動たる理論研究において、ファシズム派、国家社会主義派、そして日本主義派が分裂・対立した点に求められよう。短い活動期間の中にも、「日本革新論」の理論対立<sup>50)</sup>は凝縮していたのである。

連盟のその後は不明であるが、手がかりもある。それは事務所所在地の「東京都目黒区2-582」である。この番地こそ林癸未夫の主要著作『国家社会主義原理』『国家社会主義論策』の発行元、章華社の所在地なのであり、章華社の方が設立が古いことから、同社屋に連盟が間借りしていたものと思われる。また、33年以降も連盟の創立メンバー田中清之が「日本精神研究会」の肩書で章華社の経営にあたり、38年頃まで続いた模様である。現在、同社の出版物を26年から36年にかけて52点確認できたが、33年までは経済・哲学関係や林の著作が目立つが、34年以降は高須、池岡をはじめとする日本精神関係が圧倒的である。この変容もファシズム思想の日本主義的収束の一つのあらわれといえよう。

## 注

- 1) 近年、「急進ファシズム運動」概念の再検討も見られるが（須崎慎一「日本ファシズム運動試論」、日本現代史研究会編『日本ファシズム(2)国民統合と大衆動員』大月書店、1982年）、本稿では一応通説的理解に従う。
- 2) 拙稿「地方主義とファシズム——福士幸次郎の場合——」（『北大史学』22号、1982年）。以下、前稿とする。
- 3) 亀井秀雄「黒い葬列——ファシズム誘導の成功と不成功」（『国文学』20巻9号、1975年）72頁。
- 4) 祖父江昭二「ファシズムと戦争下の思想・文化」（藤井松一ほか編『日本史を学ぶ5現代』有斐閣選書、1975年）144頁。
- 5) 杉山平助『文芸五十年史』（鱗書房、1942年）388頁。
- 6) 松本健一「ファシズムと文学、日本」（河原宏ほか編『比較ファシズム研究』成文堂、1982年）407～408頁。

- 7) 長谷川如是閑「芸術の反動性に就て」（『新潮』1932年3月号）5頁。
- 8) 貴司山治「ファシズム文学に就て(一)」（『国民新聞』1932年4月7日）。
- 9) 山口定『ファシズム』（有斐閣選書，1979年）75～82頁。
- 10) これら内務省警保局のマル秘刊行物については、由井正臣ほか『出版警察関係資料解説総目次』（不二出版，1983年）を参照。『ファシズムの理論』は由井氏よりコピーを提供していただいた。『出版物を通じて見たる日本革新論の現況』は原書房より『国家主義運動の概要』として復刻されている。
- 11) 加田哲二『日本国家社会主義批判』（春秋社，1932年）40頁。
- 12) 河村只雄編『思想問題年表』（青年教育普及会，1936年）連盟の項。
- 13) 前掲『出版物を通じて見たる日本革新論の現況』41頁。
- 14) 生田長江「ファシズムと国民性——国民的社会主義諸党へのシンパサイザァとして——」（『中央公論』1932年4月号）57頁。生田は同年6月結成の国家社会主義文学同盟に参加する。
- 15) このうち、野島、妹尾、葛生、和田、的野の5名は公職追放の対象とされた（『公職追放に関する覚書該当者名簿』一般該当者名簿，総理庁官房監査課，1948年）。
- 16) 「軍部と提携 ファッション文学運動」（『読売新聞』1932年2月4日）。
- 17) 佐藤家と福士との交流については、佐藤愛子『花はくれない 小説佐藤紅葉』（講談社，1981年）に詳しい。
- 18) 「ファシズム座談会」（『ファシズム』2号）。
- 19) 「日本社会主義往来」（『日本社会主義』1932年3月号）54頁～55頁）。
- 20) 伏字は『出版警察報』46号（1932年7月）に依る。
- 21) 農村ファシズムに関する最近の整理として、森武磨「農村の危機の進行」（歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本歴史10近代4』東京大学出版，1985年）145～150頁参照。
- 22) 大杉彦助『山梨思想運動史』（山梨思想問題研究所，1950年）128頁。
- 23) 協調会労働課『昭和7年に於ける社会運動の情勢』（1932年51頁）。
- 24) アトリエ社発行，編集責任者吉田一穂。翌33年10月まで続き，北原白秋，宮沢賢治，岡本潤らが寄稿している。
- 25) 岩崎純孝「ファシズム文芸に就て」（『祖国』1932年4月号）。
- 26) 北原敦「地方ファシズムの思想——1920年代のイタリア——」（『思想』1981年11月号）114頁。
- 27) 有島生馬「現代伊太利文学概観」。
- 28) 岩勝雪夫「ファシズム文学批判」（『新潮』1931年4月号）。
- 29) 岩崎純孝「海外ファシズム文学を訪ねて(一)」（『東京日日新聞』1932年2月4日）。
- 30) 日本近代文学館編『日本近代文学大事典第5巻新聞・雑誌』（講談社，1978年）不同調の項（小笠原克執筆）。
- 31) 野島辰次「創立雑記」（『ファシズム』1号）。
- 32) 闇法師「国民主義文芸陣眺望」（『生命線』1932年9月創刊号）94～96頁。同誌は先進社より出され，「新興日本主義の正しき理論構成と，対立錯綜せる国家主義諸団体の綜合統一を指示し，助成する」（『発刊の辞』）ことを目的とした。
- 33) 安部博純『日本ファシズム研究序説』（未来社，1975年）223頁参照。
- 34) 紹介的記述を別にすれば，彼の国家社会主義に言及した竹山護夫氏の論稿があるにすぎないだろう（「日本ファシズムの文化史的背景」，前掲『比較ファシズム研究』）。
- 35) 座間勝平『日本ファッション運動の展望』（日東書院，1932年）302頁。
- 36) 青野季吉の論文名（『中央公論』1932年4月号）。

- 37) ファシズム研究会編『イタリア・ファシズム 戦士の革命・生産者の国家』（太陽出版，1985年）第三章「革命的サンディカリズムからコルポラティズモへ」。
- 38) 林癸未夫「非社会主義的統制経済は可能なりや」（『国家社会主義』1932年9月号）5頁。  
「海軍の一同志」は林の『国家社会主義と統制経済』を読んで次のような感想を同誌に寄せた。「大衆は、時代は、而して我等の兄弟労働諸氏は、共産主義からそしてファシズムから、既にめざめて来た。彼等はより妥当な、より正しい道を求めている。私自身がその一人だったのです。より正しい国民の道それはとりもなほさず国家社会主義に外ならない事を切実に認識した。」（9月号，54頁）
- 39) 別府峻介「ファシズムと国家社会主義（一〜四）」（『国家社会主義』1932年6，8—9，12月号）ちなみに連盟メンバーの哲学者陶山務もファシズムの将来に懐疑的であった。「たとへファシズムが政権を掌握し、その意図するところの独裁政治を実現したとしても、恐らく現在のまゝのものは最後の政治形態ではないだろう。それは確かに、一時的のそして変態的の現象であるかのようだ。必らずその次にもっと本質的なものとして何か来るものがあるだろう。」（『最近社会思想の展望』弘学館，1933年，198頁）
- 40) 前掲竹山論文349〜351，353頁参照。
- 41) 前掲『国家社会主義原理』結言322頁。こうした林の立場と正反対だったのが赤松克麿であり、彼は「国家社会主義は日本の社会主義であって他の諸国の運動とは民族精神が異って居る運動である。」とのべる（「日本精神の現実的確立」，『国本』1932年8月号）。
- 42) 以下，『特高月報』，前掲『ファシズムの理論』，田中真人「『満州事変』と国家社会主義」（渡部徹ほか編『日本社会主義運動史論』三一書房，1973年）等を参照。
- 43) 福士幸次郎「地方主義は狭いか」（『弘前新聞』1925年6月30日）。
- 44) 福士幸次郎「地方文化運動」（『東奥日報』1924年1月17日）。
- 45) 北河賢三「一九三〇年代の思潮と知識人」（鹿野政直ほか編『近代日本の統合と抵抗4』日本評論社，1982年）135頁。
- 46) 注32）と同。
- 47) 高須芳次郎「最近日本主義十年史」（『経済往来』1932年8月号）。
- 48) 「日本ファシズム——『しきしまのみち』」（『ファシズム』5号）。
- 49) 福士幸次郎「一つの錯誤」（『野火』1942年10月号。小山内時雄編『福士幸次郎著作集』津軽書房，1972年，下巻378頁）。
- 50) 前掲『出版物を通じて見たる日本革新論の現況』参照。

#### （付 記）

本稿執筆にあたり，高橋正衛，由井正臣の両氏より資料の提供および御教示をうけた。記して感謝します。



## A Note on Japanese League of Fascists

Hidemichi KAWANISHI

### SUMMARY

Several fascist literary movements grew in clusters in 1932 (Showa 7) when the discussion on fascist literature was in all its glory. Japanese League of Fascists formed in that January was one of them. The members of this league were the minor writers and theorists who were alienated in the literary circles, university professors, a lawyer, journalists and the like. And the assertion of it can be found in its bulletin, *Fascism*. The following are representative of it.

The first is the view on fascist literature by Sumitaka Iwasaki, as scholar of Italian literature. He was influenced by Italian literary scene and developed his assertion on fascist literature attaching importance to regionalism. The second is that on fascism by Tatsuji Nojima, a writer. He regards fascism as a national movement which demands the awakening of national consciousness. The third is that on national socialism by Kimio Hayashi, an economist. He insists that fascism is not a final form of government and that national socialism is a concept of a higher order. And the fourth is that on regional fascism by Kohjiro Fukushi, a poet. He, who was influenced by French traditionalists, was a fervid regionlist and therefore, he regarded each nation as a region in the world.

As mentioned above, the assertion of the league is made up of fascism, which is based on regionalism, and national socialism. Moreover, after Japanese spiritualism appears in *Fascism*, these three are opposed to one another and the assertion is beginning to disintegrate in mid-air.